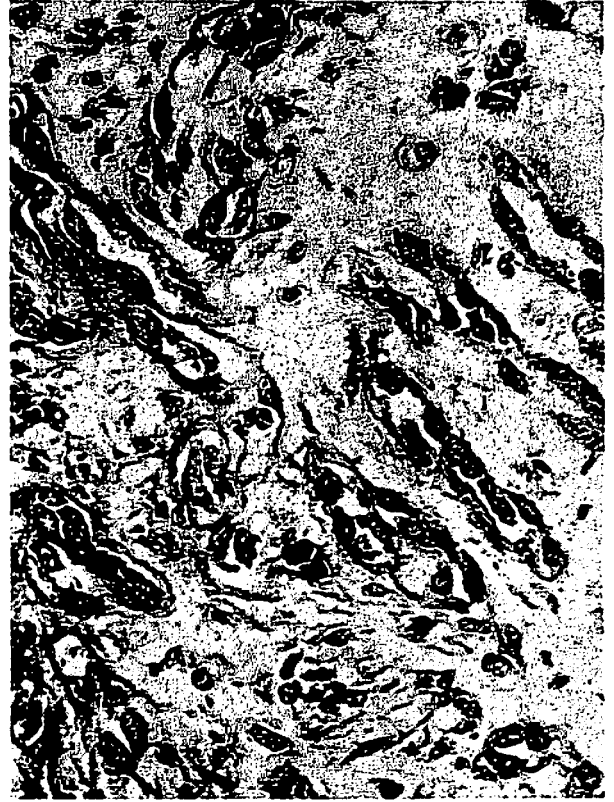
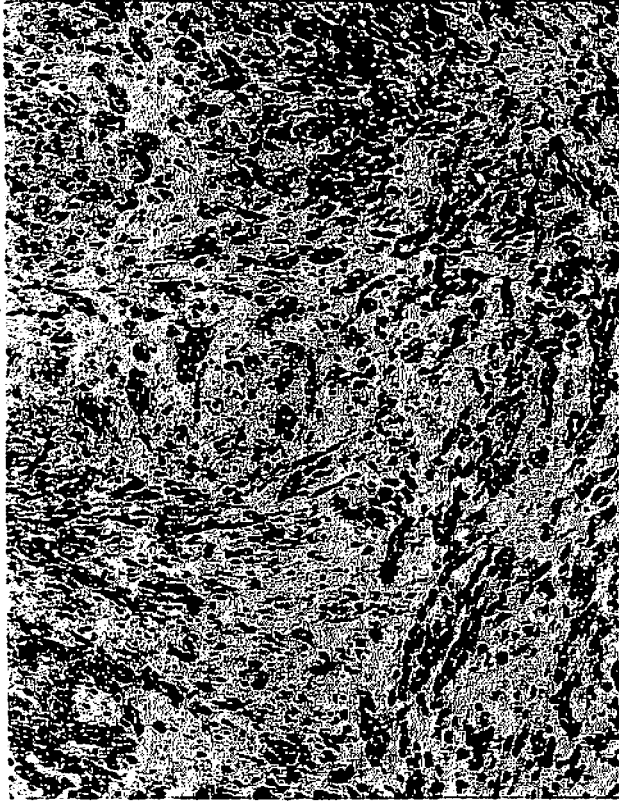


# 牛の大動脈における分化型血管内皮腫

北里大学畜産学部病理寄生虫病学教室出題 第13回獣医病理研修会標本 No.192



材料及び肉眼的所見：ホルスタイン種、雌5才の大動脈起始部に発現し、肉眼的には小指頭大に至る壁の結節状肥厚性病変として観察されたものである。病変部は比較的強固且つ血液富有性で大動脈壁内外膜位にまたがり両側へ丘状を呈して突出していた。又潰瘍性変化を伴っていた。生前の臨床所見並びに剖検時の他臓器には著変を認めなかったといわれる。

組織学的所見：動脈壁に発現した結節状の病変はその病理組織学的形態より腫瘍性々格を帯びるものであった。即ち異型性を備える細胞の異常増殖からなる新生組織はその場で増殖し、周囲組織への破壊性、圧排性増殖を示していた。

腫瘍性細胞の増殖形態は渦状乃至波状を呈し不規則で実質及び基質の極めて不明瞭なものであった。その諸所に海綿状形態を呈する毛細血管の著しい拡張乃至囊胞化及び血液充盈、壊死並びに類石灰物質の沈着が観察された。

腫瘍性細胞の核は類円形、陥円形及び紡錘形で粗剛な核質を富有し、クロマチンの凝集が目立っていた。多核巨細胞及び核分割像も稀ながら指摘された。原形質は一般に狭く微好酸性で不定形且つ突起を有するものも認め

られ、繊細な線維の形成を見、更には嗜銀性がうかがわれた。腫瘍性細胞は肉腫性に増殖し或いは個々の細胞が互いに連なり数個の細胞集団を形成し、時には索状増殖を示していた。且つこれらは又血管腔を構築し、その内腔に配列する血管芽網形成はその特徴的増殖形態と見做された。血管芽形成域では更に海綿状血管腫性病像への移行がうかがわれ、同様に腫瘍性細胞にも扁平化に至る形態的变化が指摘され毛細血管内皮への分化が示唆された。腫瘍性新生組織の基質にはAMP Sの増加が目立っていた。

以上の所見より腫瘍性細胞が毛細血管内皮細胞としての分化能を有し、その増殖にさいして血管芽及び毛細血管を形成する血管内皮性の腫瘍と見做された。血管系の腫瘍は未だ未整理の分野にある様でその分類並びに名称も様々である。ことに血管内皮系腫瘍においては甚だ意見を異にしているかの感があるが、細胞形態及び増殖性格を重視し、Staut 1953年の提唱する分化型の血管内皮腫 benign Haemangioendothelioma と診断した次第である。医学並びに獣医学分野において極く稀な発生とされる大動脈腫瘍として報告する。